

2-2. 舞鶴市の歴史文化の成り立ち

(1) 地域の歴史

○ 先史(縄文時代・弥生時代)

舞鶴市の歴史は、約1万年から1万2000年前の縄文時代前期に遡る。この頃、気候の温暖化による海面の上昇により、日本海沿岸に潟湖(ラグーン)が形成された。舞鶴には多くの入江や由良川流域など、古代人が生活の基盤を築きやすい環境が整っていたと考えられる。

縄文時代前期には、由良川流域の自然堤防上(志高遺跡など)や大浦半島の浦入遺跡で生活の痕跡が確認されている。中・後期には西地区で今田、東地区で朝来(田畔遺跡)、多門院(荒倉遺跡)、大浦地区で平(坪の内遺跡)、小橋、千歳、上佐波賀などでも見つかり舞鶴全域に広がったと考えられる。

由良川流域の桑飼下遺跡からは48基の炉跡が発見されたほか、根菜類を掘るための打製石斧が751点も出土し、堅果類を磨り潰すための石皿と磨石なども出土している。ドングリやクルミなどを磨り潰すなど集落の周辺での採集や栽培などが窺われる。また、埋甕や岩版、土偶などから縄文時代の精神生活も窺い知ることができる。

また、この時代、遠く離れた土地との交流が確認されている。昭和37年(1962)9月10日、大浦半島の小橋を流れる小橋川の護岸工事中に発見された有舌尖頭器には奈良県二上山産のサヌカイトが使用されており、平成4年(1992)、西地区の女布遺跡で発見された有舌尖頭器にも持ち込まれたサヌカイトが使用されていた。また、平成10年(1998)、浦入遺跡で、縄文時代前期に外海に漕ぎ出したことがわかる初の丸木舟が1艘発見され、隠岐の黒曜石や北陸産の蛇紋岩製耳飾りや土器なども発見された。浦入遺跡や豊かな生活の痕跡を残す由良川流域の志高遺跡、桑飼下遺跡の調査成果からは畿内だけではなく、海を介しての文化が伝播したと考えられる。アンジャ島遺跡からは、丸木舟の製作に使用したとされる乳棒状蛤刃石斧2点^{にゅうぼうじょうはまぐりばせき}が出土しており、市内沿岸部に発達した潟湖を利用した港があったと思われる。

縄文時代末期、大陸から水稲耕作技術が北部九州に伝わり、稲作は数十年で西日本に広まった。舞鶴



図2-26 貼石墓(志高遺跡)



図2-24 出土した丸木舟(浦入遺跡)



図2-25 乳棒状蛤刃石斧(アンジャ島遺跡)

では、志高など由良川沿いの自然堤防上に集落ができ、弥生時代の末頃には10か所以上の集落が成立して水田の開発は市域の周辺部へと広がっていった。弥生時代中期の人々は志高遺跡の発掘調査成果から円形の竪穴式住居に住み、おおよそ10家族で集落を構成しており、農閑期には石包丁や石斧などの道具類、管玉や勾玉といった装身具類、弥生土器の製作などに励んだことが推測されている。

また、祭器と考えられている銅鐸や銅剣形石剣が発見・出土しており、豊作祈願や、収穫を祝う祭礼が執りおこなわれたと想像される。家族が死ぬと、集落周辺の方形周溝墓に埋葬され、有力者とその家族は、当時山陰地方の影響を受けた「貼石墓」^{はりいしぼ}に葬られた。弥生時代末期に近づくと、山の尾根を削った方形台状墓に葬られた。

○ 古代(古墳時代・奈良時代・平安時代)

古墳時代になると、ムラを見おろす丘陵地や山裾、交通の要所に前方後円墳に代表される大きな墓が築かれるようになった。由良川下流域を見渡す山の上にも弥生時代から古墳時代にかけての墳墓が築かれており、その立地から由良川の水運を掌握した首長の墓と考えられている。人々は血縁を中心とした集団をつくり古墳は一族を代表する族長の墓であった。6世紀後半から出現する横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}は、大和朝廷の支配の影響とみられる。大和政権下、鉄製農具の普及や灌漑設備によって、農業生産力は急速に高まり、各地で豪族たちも力をつけていった。



図2-27 凝灰岩製の組合せ式石棺(切山古墳)

昭和26年(1951)に西地区の平野部を見下ろす境谷の丘陵地で発見された切山古墳は、4世紀後半に築かれた舞鶴で最古段階の大型古墳である。古墳には凝灰岩製の組合せ式石棺が使われ、真赤に彩られた棺内には人骨とともに、鉄剣・銅鏃^{どうぞく}などが副葬されていた。凝灰岩は丹後半島に求めたと考えられることから、西地区の平野部を支配していたこの首長は、丹後の巨大古墳の主との間に政治的関係を結んでいたことが窺える。



図2-28 大波7号墳

舞鶴市域には300基を超す古墳があり、その多くは6世紀後半以降に築かれた横穴式石室(遺体を埋葬する石積みの墓室)をもつものである。横穴式石室は追葬が可能な家族墓であるため、妙見山古墳(東地区)やニイザ古墳(加佐地区)といった地域ごとにみられる古墳からは、その地域に有力一族が現れていたことがわかる。海岸部には三浜丸山古墳・田井古墳・白杉古墳^{しらすぎ}などにも横穴式石室を用いた古墳が確認されているほか、舞鶴最初の横穴式石室が舞鶴湾口を見下ろす浦入西2号墳であることや最大の横穴式石室が白杉古墳であることから、海と深く関わりをもった一族の勢力の大きさが窺われる。また、78基からなる朝来の大波・奥原古墳群^{おおば おくはら}は特徴的で、6世紀後半から7世紀前半の間にこれだけ多くの古墳をつくったのは近隣地域でも珍しく、朝来地区の集団の特殊性を表している。



図2-29 千歳下遺跡出土玉類

5世紀から6世紀にかけて、日本には大陸から灌漑水路、須恵器などをつくる高度な技術が伝えられた。舞鶴でも5世紀前半、湾口に技術者集団が住んでいた形跡が残されている。浦入遺跡で見つかった鍛冶炉^{かじろ}は最先端の技術である鉄の加工

がおこなわれていたことを示している。また、その南には鏡や玉の他にも大量の鉄を使い航海の安全を祈った千歳下遺跡がある。出土遺物のなかには大陸からもたらされた破鏡^{はきょう}や鑄造^{ちゅうぞう}の鉄斧があったことから日本海に開けた窓口であったことが窺われる。

奈良時代になると、都(奈良)では、大化改新、壬申の乱を経て、天皇を中心とする律令政治が始まった。地方には中央貴族が国司として着任し、地方豪族は郡司に任命された。当時、条里制が実施されており、舞鶴市内に残る60か所の中ノ坪・東坪といった坪地名は、条里制の名残であると考えられている。都から出土した木簡に「加佐」と書かれているものが5点見つかり、舞鶴も律令制のなかに組み込まれていた。

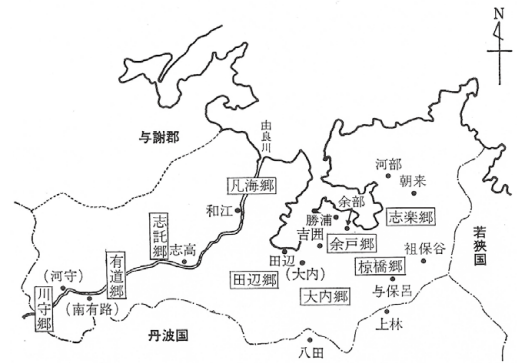


図 2-30 加佐郡の郷名 (出典:『舞鶴市史』)

和銅 6 年(713)、丹波国から加佐郡を含む 5 郡が分割されて丹後国が置かれた(加佐郡は、現舞鶴市域と福知山市大江町、宮津市由良を含む地域)。平安時代に編纂された「和名類聚抄」^{わみょうるいじゆしやう}には、加佐郡には志楽・棕橋・大内・田辺・凡海・志託・有道・川守・余戸の各郷があったと記している。加佐地名は、法隆寺旧蔵の御物金銅観世音菩薩立像の台座に刻印された銘文中に「笠評君名□古臣」、「辛亥年」とあり、「辛亥年」は白雉 2 年(651)と考えられており、これが最も古いものだと考えられている。

大宝律令制定(701年)の後に「評」から「郡」へ表記方法が改められ、藤原宮(694~710)からは「加佐」と推定される木簡が 5 点発見されている。木簡には、舞鶴から都に運ばれた調や贄(天皇への貢納物)について記されている。藤原京出土木簡には、「丹波国加佐郡白菓里大贄久己利魚腊一斗五升和銅二年四月」(白菓里=現在の志楽地区から大浦半島南西部、久己利魚は「カワハギ」の一種、^{きたい}腊は干物)と記されている。平城京から出土した木簡には、「□□郡志宅里猪食部装白米五斗」(志宅里=志高周辺)と記されている。この時代、「続日本紀」や「正倉院文書」には、舞鶴で飢饉がおり、援助がおこなわれたこと、棕橋部乙理の奴が稲一千束と引き換えに都に進上されたことが書かれている。

延暦13年(794)、都が平安京(京都)に移され、舞鶴から都の距離は近くなった。「和名類聚抄」に、舞鶴から都までの日数を「上りで7日、下りで4日」と記載されている。(上りは年貢の米や反物などの積荷があり、時間がかかったと考えられる。)

舞鶴の寺院にはこの頃に縁起をもつものがあり、^{たねじ}多禰寺は用明天皇第3皇子^{まろこ}麻呂子親王を開基とし、^{こんごういん}金剛院は、薬子の変に連座し廢太子となった^{たかおか}高岳親王開基、また、^{えんりゆうじ}圓隆寺は皇慶(谷阿闍梨)が中興したとされている。松尾寺は海人開基で、鳥羽天皇の篤い信仰を受けたと伝えている。飛鳥時代から続く薬師信仰に加え、平安時代には観音信仰が大きく広がり、現在の西国三十三所巡礼のもととなる霊場巡りが始まった。

平安時代中頃には災害や飢饉が多発し、その原因として末法の世の到来によるものと考えられたため、経典を容器に入れ、土中に埋めて後世へと保存する^{きやうづか}経塚が造営された。舞鶴では、^{ゆご}油江や天台などで経塚が造営された。

^{しきないしや}式内社は、延長 5 年(927)に選上された「延喜式」神明帳によると、加佐郡11座として、奈具神社、麻良多神社、大川神社、伊知布西神社、^{しどり}倭文神社、高田神社、^{みかげ}弥加宜神社、日原神社、三宅神社、^{やはら}笑原神社、阿良須神社の名が記載されており、なかでも大川神社は朝廷から絹布や真綿、糸などが贈られた加佐郡唯一の神社で鮭に乗ってきた霊



図 2-31 国宝 普賢延命像 (松尾寺)



図2-32 「笠百私印」刻印製塩土器
(浦入遺跡)

神を祀ったと伝わっている。そのほか、高倉神社(長浜)、八幡神社(平)、宮谷神社(福来)では平安時代後期の神像が伝わっている。

奈良時代初頭、志高遺跡では里長階級の家や倉庫は掘立柱建物に、村人の大半は竪穴式住居で生活をしていた。奈良時代後期から平安時代初頭には、村人の家は2間×3間ほどの掘立柱建物となり、米を納めた高床式の倉庫群が並ぶ、この地域の中心的な村になっていった。「類聚国史」では、「大同2年(807)、丹後国加佐郡百姓に租・調を免ず。水害殊に甚だしきを以って也」と記載されており、大洪水に見舞われたことが窺われる。浦入遺跡では、奈良時代後半から、製塩や鍛冶の大規模な生産が始まっており、生産活動の拠点として人や物資が集まったと考えられている。9世紀の製塩土器支脚には「笠百私印」と刻印されたものがあり、この地で「笠氏」が存在していたこと、塩生産に笠氏が関与していたことが確認されている。平安時代末期にも若狭湾沿岸で盛んに塩生産がおこなわれていた。

○ 中世(鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代)

中世は、今の舞鶴市のような行政区画ではなく、荘園や郷をひとつのまとまりとしていた。荘園や郷は平安時代末期から中世を通してみられる土地制度で、天皇家や大社寺が領主として諸国の荘園や郷を支配した。舞鶴市域の荘園は、村上天皇(在位946~967)女御が寄進したとされる志高荘が最も古く(「広隆寺縁起」、平安時代末期には、大内荘、志楽荘などが成立した。正応元年(1288)の田数帳をもとに、長祿3年(1459)頃成立したとみられる「丹後国諸荘園郷保惣田数帳」によると、市域全域で中世的な荘園や郷が成立していたことが確認されている。

源頼朝によって開かれた鎌倉幕府は、武士を御家人として組織し、彼らを荘園の地頭として配置し、各国に守護を置いて政治体制を整えた。

源平の戦いで荒廃した南都寺院復興の号令がかかり、集結した仏師のなかに運慶と快慶がいた。舞鶴にある金剛院の執金剛神立像、深沙大将立像、松尾寺の阿弥陀如来坐像の3軀は、快慶の作品である。金剛院は、その縁起に平安時代末の久安2年(1146)に鳥羽天皇の皇后得子(美福門院)の御願所となり、平忠盛を奉行として三重塔を修復し、阿弥陀如来が安置されたと記されている。他にも、多禰寺の金剛力士像、圓隆寺の毘沙門天など、鎌倉時代を代表する仏像が多く残されている。

南都奈良の諸寺の再建がなされる一方、新興の武士や農民たちの求めに応じて、平安仏教の天台・真言密教から、鎌倉新仏教(浄土宗・浄土真宗・時宗・法華宗・臨濟宗・曹洞宗)がうまれた。舞鶴の東地区には、14世紀から春屋妙葩(普明国師)や谷翁道空、曇翁などが臨濟禅をもたらし、西地区では、竺翁雄仙が桂林寺を開いて、曹洞宗の基盤をつくった。

中央では、後醍醐天皇と足利尊氏によって鎌倉幕府が倒された。二人はやがて分裂し、足利尊氏は光明天皇を擁して征夷大將軍となり室町幕府(北朝)を開き、後醍醐天皇は吉野に逃れ南朝を開いた。南北朝の動乱は約60年間におよび、3代將軍足利義満によって合一された。舞鶴には南朝方の遺品として後醍醐天皇皇子の護良親王による金剛院の制札や、南朝年号が刻まれた登尾八幡神社の「御正体鏡」がある。しかし、金剛院や登尾は北朝の足利尊氏が醍醐寺・西大寺に寄進した志楽荘のなかにある。また、観応の擾乱期には軍勢の狼藉が記録されるなど志楽荘も南北朝の動



図2-33 御正体鏡(登尾八幡神社)

乱に巻き込まれていたことがわかる。

志楽荘に伝わる「梅垣西浦文書」^{うめがきにしうらもんじよ}は、史料にみられる地名が現在の小字名に比定できることから、領主関係や村の成立など、この時代の様子がよくわかる。河辺に伝わる祭礼芸能はこの頃の農事に関わる願いと時代背景を色濃く残し、豊作を祈ったものである。

また、室町幕府が臨済宗に帰依したために、それまで、密教の隆盛によって盛んであった仏教彫刻は下火になり、逆に禅宗が求道の場づくりを重視することから、庭や建物に優れたものが多くこのさされるようになった。金剛院塔婆(三重塔)もこの時代を代表する建築で、斗栱(軒を支える栱組み)など楼閣建築の粋がこらされている。一方、民衆には時宗や一向宗のように、おどりと念仏によって仏と合一化しようとする仏教がむかえられた。道端には阿弥陀の板碑などの石造物が盛んにつくられた。追善供養のための宝篋印塔や五輪塔、石灯籠も、中世の時代から始まるものである。

この時代、農業だけでなく、商業や金融などが大きく発展した。しかし、応仁の乱を経て戦国時代に突入すると、戦乱が続き、人々は武士や農民にかかわらず「一揆」や「惣」と呼ばれる結合組織によって自身の身を守ろうとした。武家と公家、都市と地方、大陸と伝統、支配層と被支配層それぞれに文化を生み、影響しあって融合した時代であったといえる。



図 2-34 大俣城跡

中世、山の多いこの地では、戦略の拠点として、物見の場や防御陣地として多くの城がつくられた。遺跡分布調査では、城跡が170か所以上確認されている。山頂を削平し、曲輪を設け、堅堀を掘って容易に上がれないようにつくられている。また、島や海側にある城は、水軍の城だと考えられている。南北朝期の山城である荒張城では建武4年(1337)に北朝方の吉川経久が丹後を攻めたときの攻防戦がおこなわれている。

加佐郡は若狭・丹波との国境にあり、主な城として、溝尻城、女布城、中山城、志高城などがあつた。丹後守護の一色氏と若狭守護の武田氏との争いが絶え間なく続いていたことを示している。

「東寺過去帳」によると、倉梯城では、永正13・14年(1516・1517)、若狭守護武田氏と一色家臣団との戦いがあり、籠城した一色氏守護代延永春信は、武田・朝倉・朽木の連合軍に攻められ敗走した。両軍の死者は2000名を超えたという。この倉梯城は現在、溝尻城に比定されている。

この頃の土豪に組織される武力集団は、普段は農民と変わらぬ暮らしをし、いざというときは武器をもってはせ参じたと思われる。山城の主のなかには、農民化したものも多かった。

丹後水軍との関わりも深かった。織田信長の一向一揆の北庄攻めには、一色、大島、桜井などの水軍が参加している。細川氏が織田軍としてこの地を攻めたときも、桜井と最初に交渉して味方に引き入れたという。凡海郷の存在や松尾寺の開基が海人であること、舟溜り、舟かくしなど、水軍に関わる土地名が残っていることなどから、舞鶴湾内の入江や島影に水軍の拠点があつたと考えられる。

○ 近世(安土桃山時代・江戸時代)

天正8年(1580)、信長の命により丹後国は細川藤孝・忠興親子の所領となり、宮津に本城、田辺・峰山などに支城を築いて丹後を治めた。

細川藤孝は、天文3年(1534)に生まれ、慶長15年(1610)に77歳で没した、安土桃山時代の武将であり歌人である。足利将軍家の家



図 2-35 細川幽斎像(天授庵)

臣の三淵氏みつぶちに生まれ、細川氏の養子となり、没落期の室町幕府に仕えた。その後、織田信長に仕え、本能寺の変で信長が亡くなると、出家して幽斎玄旨ゆうさいげんしと号し、豊臣秀吉に仕えた。関ヶ原の戦いでは徳川家康側につき、江戸幕府の儀礼制度の成立には、故事・政治儀礼に通じた有識者である幽斎の助言によるところが大きかったといわれている。

また、和歌を三条西実枝さんじょうにしさねきに学んで古今伝授(「古今和歌集」の解釈の秘説を師が弟子に伝えること)を受け、歌学の秘伝を江戸時代に伝え「近世歌学の祖」と称された。

豊臣秀吉の没後、石田三成と徳川家康の対立を中心として、諸大名の勢力争いが激しくなるなか、慶長5年(1600)、細川忠興は家康の会津征伐に加わり、主力軍を率いて関東へ向かう。その隙をつき三成は大坂で挙兵し、同時に家康側についた細川氏成敗のため関西の諸将に対して、丹後出陣を命じた。

細川幽斎は留守軍の軍勢わずか500名余りを指揮し、本城の宮津城などを焼き、守りに適した田辺城(天守・本丸を囲んで二ノ丸、三ノ丸がある輪郭式の平城。東に伊佐津川、西に高野川、南は湿地、北は海に接した要害の地に築かれる。)で籠城の体制をとった。慶長5年(1600)7月下旬、福知山城主小野木重勝ら石田方軍勢1万5000名は丹後に侵攻。田辺城の周囲に陣取り、田辺籠城戦が始まった。



図2-36 田辺城石垣

幽斎の討死による古今伝授の廃絶を憂慮した後陽成天皇ごようぜいてんのうは、幽斎に開城を勧めたが、幽斎は「開城は武人の本意ではない」といって固辞し、古今伝授をおこなっていた後陽成天皇の弟、智仁親王としひとに対し、古今伝授の秘伝書と「古へも今もかはらぬ世の中に心のたねを残す言の葉」という和歌一首を託した。(明治6年(1873)、田辺城は廃城とされ、本丸付近は現在、舞鶴公園になっており、この秘伝書と和歌を伝えたとされる場所、心種園に碑が建てられている。)9月、なおも幽斎が討死することを惜しんだ後陽成天皇は、田辺城を囲む西軍の陣に勅使を送り、50日余りの田辺籠城戦は終わりを告げた。田辺城発掘調査では、籠城戦を偲ばせる多数の鉄砲玉のほか、天守台跡が確認されている。その後、細川家は39万石に加封され、豊前国中津へ国替えとなった。

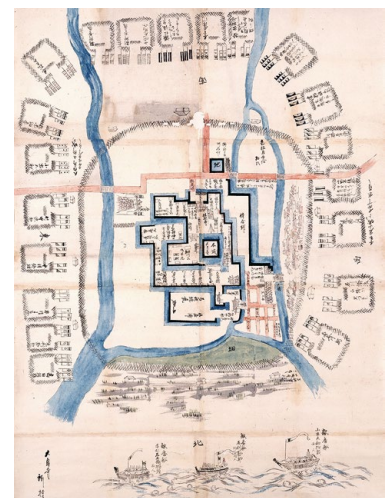


図2-37 田辺籠城図(大泉寺)

漁業の面では、漁師として特別な権利を与えられたと伝えられる吉原漁師の存在がある。慶長5年(1600)の田辺籠城戦の際に、海手として籠城方に協力したため、細川幽斎から領内水際より3間(約5.4メートル)の自由使用を許され、以来、吉原漁師の沿岸出漁が盛んになったといわれる。また、成生村は特殊漁法によるブリを細川氏に献上し、続いて徳川將軍家の御物となったいわゆる「御用鰯」が始まった。

徳川家康は、「天下分け目の戦い」と呼ばれた関ヶ原の戦いで石田三成らを破り、慶長8年(1603)に江戸幕府を開き、幕藩体制(土地・農民・町人を支配するしくみ)をつくりあげた。幕府は、少数の武士(人口の7%)が多数の農民(80%)や町人を支配するため、士農工商の身分を定め、厳しい身分制度を定着させた。

天文18年(1549)に日本に伝わったキリスト教は、信者の急激な増加を恐れた幕府による慶長17年(1612)の禁教令によって

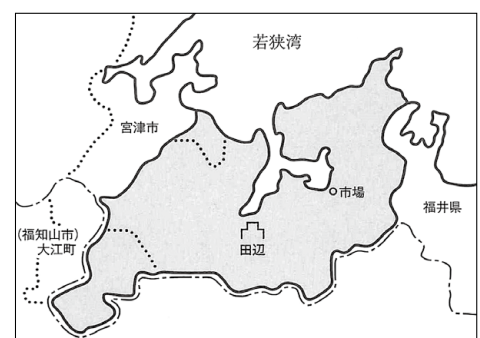


図2-38 田辺藩領域図

禁止された。また、外国との貿易は、オランダ人と中国人だけに限られ、長い鎖国の時代が始まった。

慶長5年(1600)、細川氏国替えの後、信濃国飯田城主京極高知が丹後国に^{きょうごくたかとも}入国した。高知は、たびたび洪水をおこしていた伊佐津川の瀬替えを完成させるとともに、慶長7年(1602)に全領の検地をおこない米収穫高12万石の石高を検出して、当国の石高を確立した。元和8年(1622)、高知の遺訓により、丹後国は3人の息子に分与され、宮津藩(7万8000石)・田辺藩(3万5000石)・峰山藩(1万3000石)の3藩が成立した。

上方全域を譜代大名領にする幕府の政策により、寛文8年(1668)に京極氏が但馬国豊岡へ国替えした後、京都所司代^{しよしだい}の要職を退いた牧野親成^{まきのちかしげ}が摂津国から入国した。牧野氏は三河以来の徳川家譜代大名で、小藩ながら幕府の要職にあった。2代富成は奏者番、3代英成は奏者番・寺社奉行・京都所司代、4代明成^{あきしげ}は奏者番をそれぞれ勤めた(奏者番：大名、旗本などの將軍拝謁のとき、その取り次ぎをし、礼式を司り、ときに大名屋敷へ將軍の言葉を伝える上使役)。

当時の武士の生活は、農民の年貢によって支えられていた。そのため藩は、農村を強固に統制して年貢収入の確保を図った。田辺藩では、農民が室町時代から自治的に組織・運営していた惣村などをもとに、行政組織に改変していった。121か村(後に128か村)を8組に分け、各組に大庄屋を置き、各村に村方三役(庄屋・組頭・百姓代)を置いた。また、藩庁機構としては村々を6つに区分し、それぞれに代官を置き、これを郡奉行^{こおりぶぎょう}が統括し、郡奉行→代官→大庄屋→村方三役という緻密な農村支配を確立した。

やがて、武力による支配は行き詰まり、藩主の徳治を農民・町人に顕示する民衆教撫政策へと変化した。例えば、町行事への援助、牧野入封200年祝賀行事、心学の奨励や「田辺孝子伝^{たなべこうしでん}」の出版もそのような藩の動きのなかでなされている。

幕府が大名統制のために定めた武家諸法度のなかで参勤交代が制度化され、譜代大名である牧野家は1年ごとに江戸と田辺を往復しなければならなかった。江戸までの道順について、寛政7年(1795)の藩士の記録によると、「田辺城→本町→田辺大橋→寺内^{じない}→新町→神明下(紺屋)→桂林寺下→朝代神社→引土(京口番所)→京橋→七日市→山崎(京田)→善通寺(真倉)→一ノ瀬→京街道→江戸」のルートが確認されている。



図2-39 牧野家伝来の甲冑

また、東海道(約518km、所要日数15日)と中山道(約633km、所要日数18日)の2コースがあった。参勤交代制度により交通網は整備され、商品流通や人の移動もたやすくなったが、藩の経済的な負担は大きく、やがて財政を圧迫していった。

慶長7年(1602)の検地で決められた公定収穫高により、田辺藩では、収穫米のうち75%は年貢として納めたといわれている。また、藩も小物成^{こものなり}や継物^{つぎもの}といった副税がかけられたため、農民にとっては重い負担となっていた。

江戸時代中期・後期になると、年貢を増やす目的で、藩は新田開発に力をいれた。東地区では、有力農民を中心に、湾に面した浜・溝尻^{いちは}・市場^{せんげんじ}・泉源寺で新田開発がおこなわれた。現在の浮島の地形は、新田開発によって周りの海を干拓したことによる。西地区では、医師の新宮涼庭^{しんぐうりょうてい}が順正書院維持のために喜多村の海面を埋め立てた新宮新田が有名である。

また、農具の改良・発明(土を深く耕すための備中ぐわ、脱穀のための千歯こきなど)により、農作業の手助けになった。

これらの取り組みにより、しだいに生産量を高め、手もとに生産物を残す余裕をもつようになると、市場で貨幣にかえるなど、これまでの自給自足的な生活から、貨幣を使う生活に移行していった。田辺藩では農民の工夫により、貨幣にかえるために、土地に適した商品作物を多く生産するようになった。代表的なものは、桑(養蚕)^{あぶらきり}・油桐(桐実油)^{はぜ}・櫛(ろうそく)^{こうぞ}・楮(紙)^{こうぞ}・漆・藍などで、由良川筋では紙の材料として、楮^{こうぞ}・ミツマタの他、特に蚕糸業をおこなった。享保16年(1731)の史料には、「蚕おびただしくこれを飼い、糸綿を売買する」と記されている。この他、大浦ではミカン・ビワ、伊佐津の紙すき、「白糸」の地名の由来となった浜村の素麵^{そうめん}づくりもさかんであった。

農業生産力の向上により経済的に余裕のある民衆は、旅や祭といった娯楽や教養(農業改良の情報収集など)を求めた。近世の旅は、西国巡礼や伊勢参宮などの信仰の旅であるとともに、物見遊山^{ものみゆざん}の旅でもあった。当時の人々は、旅を通して教養と話の種を仕入れ、都市の文化を地方へ伝播する役割をも果たした。

田辺では、秋に祭礼が催され、現在でも市内各字^{ふりもん}に振物・太鼓などが伝わっている。城下町^{うぶすなかみ}の産土神である朝代神社の祭礼では、藩士や城下の人々が一斉にくりだし、芸屋台をひき、太鼓を打ち、祭を楽しんだ。瀬崎には人形浄瑠璃の道具が伝存しており、昭和初期まで神社の舞堂^{まいどう}で盛んに人形浄瑠璃が演じられていた。

社会は武力による支配ではなく、官吏としての能力が求められたため、教育機関である藩校を整備し、幕府が官学とした朱子学を中心に文武両道を教えた。田辺藩では、牧野家3代英成が学事担当を置き、天明年間(1781~88)6代宣成^{ふさしげ}により「明倫齋」が城内三ノ丸にひらかれ、文久年間(1861~64)9代誠成^{たかしげ}により学舎を増改築して「明倫館」と称された。なお、明倫館は維新後に明倫小学校となった。

武士だけではなく、民間の教育機関として、読み書き計算が不可欠であった商人・職人を対象に寺子屋が町方を中心に広まり、18世紀後半になると、農村でも寺子屋が定着していった。田辺には、心学修行の道場、求心舎^{きゅうしんしゃ}と立敬舎^{りっけいしゃ}があった。

田辺藩では、城下町として発達した西地区が、大きく「町屋の暮らし」を展開させ、東地区には、在郷町として古くから市場があり、志楽荘の生産物資の集散地としてすでに中世には存在していたと伝えられている。江戸時代の道中記・巡礼日記に「いちば」の名が必ず登場することから、西国29番札所松尾寺巡礼の宿場町としての性格が強かったことが窺える。



図2-40 瀬崎人形浄瑠璃用具



図2-41 伝・旧明倫館正門

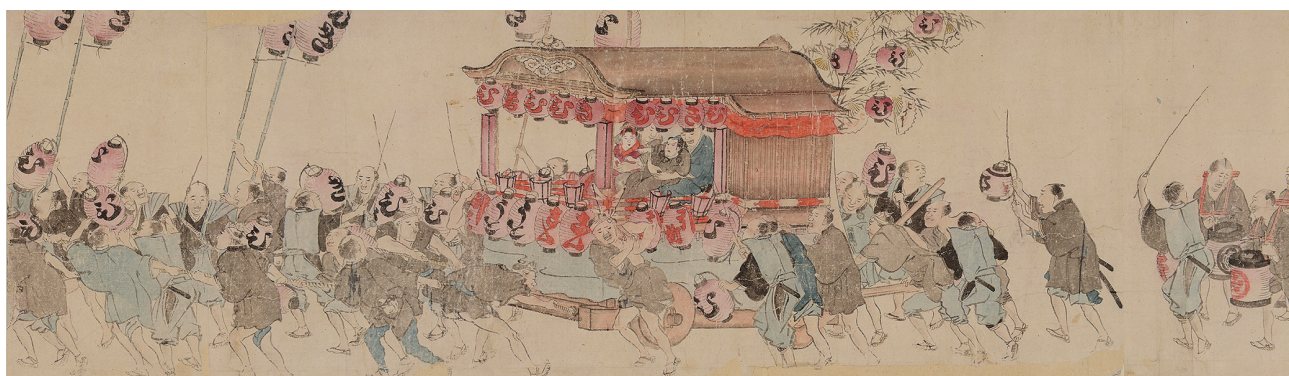


図2-42 朝代神社祭礼絵巻(個人蔵)

城下町は、築城と並行して現在につながる町割りがおこなわれた。はじめに城下町を保護育成するために地子(土地にかかる税金)を免除された御免町が、9町とされ、中期には10町となった。地子を支払う地子町は6町で、合せて16町で城下を形成していた。町の自治は、町奉行のもとに惣年寄、そのもとに年寄・肝煎・組頭を置いておこなわれた。城下町の中心である竹屋町は、天保5年(1834)の「商売書上帳」によると、422軒のうち、荒物商や魚商など「商い」が42種305軒、船大工など職人が20種44軒、髪結・按摩などサービス業その他が15種73軒を数えていた。

江戸時代は年貢を米で取り立てたため、天領と呼ばれた幕府の直轄地から大消費地江戸へ米などを運ぶため、海運が利用された。寛文11年(1671)には東廻り航路が、同12年に西廻り航路が開発され、海運の大動脈ができた。中後期になると産業が発展し、地方都市では特産物が生みだされるようになり、米やそのほかの商品を運ぶ廻船網が全国に張り巡らされた。

田辺藩では、由良・神崎・田辺・市場などに湊をもち、日本海海運の一翼を担った。特に由良川水運により、内陸部の福知山ともつながる由良・神崎は湊としても、水夫の供給地としても賑わった。

18世紀になると、産業の発達、農村への貨幣経済の浸透、藩の重税により、百姓間に貧富の差を拡大させていった。また、凶作と飢饉(特に江戸三大飢饉：享保18年(1733)・天明4年(1784)・天保8年(1837))により生活に大きな痛手を受けた。こうしたことが、幕藩体制の基礎である農村の構造を変化させ、地主と小作人、村役人と平百姓などの対立を表面化するようになった。田辺藩では、京極時代に伊佐津周辺の村々が年貢の軽減を求め一揆を起している。また、享保元年(1716)には、森・行永両村で百姓36人が逃散している。さらに、全藩領をまきこんだ百姓一揆が、享保18年(1733)と宝暦6年(1756)におこっており、農民たちは享保一揆で5年間の減免などを勝ち取ったが、享保一揆で3名、宝暦一揆では8名の刑死者を出している。この他、飢饉時の局地的な騒擾や村方騒動により、封建社会の基礎は揺らいでいった。

寛永16年(1639)、幕府はポルトガル船の来航を禁止したことで、鎖国を完成させたが、18世紀になると、ロシア船が日本近海に現れはじめ、19世紀になると、イギリスが通商を求め来航した。嘉永6年(1853)アメリカのペリーが4隻の黒船で浦賀に来航し、開国を要求。安政5年(1858)日米修好通商条約を結び、開国に至った。田辺藩でも、文化5年(1808)以降、藩士だけではなく、猟銃をもつ猟師に御用が言いつけられ、一般の百姓に荷物運搬の軍役が課せられた。ペリーが来航すると、藩は武器の調達などに軍費がかさみ、財政を圧迫した。この時期、藩は儒学者野田笛浦を江戸から田辺に帰藩させ、海防と藩校の改革にあたらせた。藩内には台場(砲台)が建設され、大砲が据えつけられた。

このような内憂外患のなかで、幕府の統率力は弱まり、開国派と攘夷派、佐幕派と尊王派が入り混じって明治維新に向かった。田辺藩は、家康以来の譜代大名であり、二条城や京都御所の警護を命じられている。元治元年(1864)、第1次長州征伐では、進発の將軍の警護、第2次長州征伐では丹後近海警衛のため、国元待機となった。鳥羽伏見の戦いに宮津藩・福知山藩・小浜藩などが参戦するなか、田辺藩は動かず大政奉還も率先しておこない、明治元年(1868)には山陰道鎮撫使に対して無血開城した。



図2-43 安寿姫と対王丸
(糸井文庫)



図2-44 奉納和船

○ 近現代(明治時代・大正時代・昭和時代・平成時代)

田辺藩は、明治2年(1869)版籍奉還の後、紀伊田辺藩との同一藩名を解消するため、田辺城の別名「舞鶴城」から「舞鶴藩」に改名し、明治4年(1871)7月、廃藩置県により舞鶴県に改名した。同11月には豊岡県に統合され、明治9年(1876)に京都府に編入された。

舞鶴の村々では、明治5年(1872)頃に戸籍の編製、太陽暦の採用、学制発布、徴兵制施行、新貨幣(円)への切り替え、土地売買の自由など打ち出された。翌6年(1873)には地租改正条例が布告され、土地の面積や地目によって納税金額が定められ、大きな変革期を迎えた。

明治4年(1871)廃藩置県によって藩校明倫館は廃止され、明治5年(1872)に学制が発布されると、翌年、加佐郡内で16校が開校し、さらに明治9年(1876)までに12校が順次開校した。寺や民家を利用した学校が大半であったが、このとき開校した学校が現在の小学校の母体となっている。高等教育機関は明治42年(1909)に高等女学校、大正11年(1922)に舞鶴中学校が開校した。

養蚕は江戸時代よりおこなわれていたが、明治政府の殖産興業政策を追い風に養蚕業が栄えた。舞鶴では、明治11年(1878)に審致舎による「舞鶴製糸場」が設立され、明治29年(1896)には綾部に郡是製糸株式会社が設立された。明治40年(1907)には郡立蚕業学校(現京都府立大江高校)が開校した。

北前船は、江戸時代から明治時代にかけて栄えていたが、明治後期になると、鉄道の発達により陸上輸送へ移行したことや、電信の発達により全国の物価が平均化したことから、姿を消していった。

明治政府は、欧米に並ぶ強国へと日本を育てるために「富国強兵」をスローガンに掲げ、経済の発展と軍事力の強化により近代的な国家をめざした。

明治19年(1886)、海軍当局は舞鶴湾の測量と視察をおこない、同湾が無比の良港であると確認し、第4海軍区(島根県〜秋田県の海岸と海面)における鎮守府(海軍の役所)を舞鶴に設置することに決めた。設置のために、浜・北吸・余部下・余部上・長浜・佐波賀・平などの土地を買収し、明治34年(1901)余部下に鎮守府が開庁した。鎮守府は、戦艦三笠の他19隻の艦艇、海兵団、水雷団、海軍工廠、海軍病院などをもち、日本海側唯一の軍港として、日露戦争をはじめ、次々に勃発する戦争の重要な軍事基地になった。同時に舞鶴は要塞地帯区域に指定され、住民の日常生活に様々な制限が加えられた。

江戸時代、舞鶴湾を囲み、田辺藩というひとつの共同体として発展してきた舞鶴だが、軍港設置により東地区と西地区は性格の異なる都市として発達していった。

東地区は、かつて農漁村であったが、海軍の鎮守府開設とともに、急速に発展した近代の町であり、軍港都市として計画的なまちづくりがおこなわれた。浜・余部下・余部上は新市街の中心となり、河川の流路を変え、明治36年(1903)中央部は格子状に町割りされた。碁盤目状の街路の多くに当

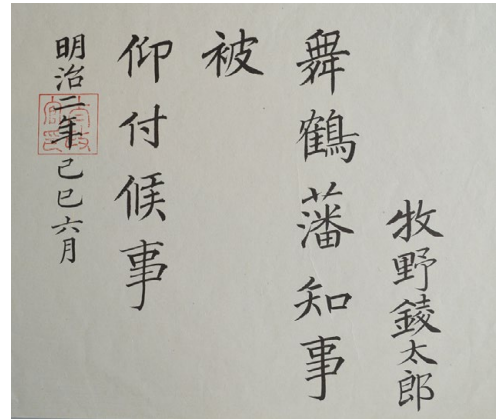


図2-45 舞鶴藩知事任命書



図2-46 舞鶴鎮守府

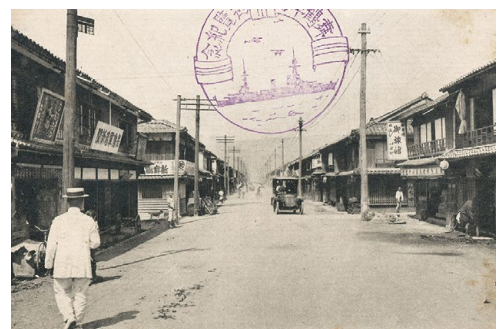


図2-47 三条通(大正時代頃)

時の軍艦に因む名前(三笠や富士など)が付けられている点の特徴である。

西地区は、細川氏が築いた城下町をもとにして発展してきた。江戸時代には藩領の中心として栄え、昭和に入ると、樺太、朝鮮、大連、天津、北海道間にそれぞれ定期航路をもつ商港となっていた。いまま高野川沿いに並ぶ土蔵群がその名残をみせている。竹屋町・丹波町・平野屋



図2-48 西港修築工事

町などには、城下の商人町の面影を伝える町屋が点在し、山沿いに形成された寺町の景観も健在である。

明治5年(1872)9月、新橋・横浜間に鉄道が開通した。舞鶴では、明治22年(1889)に鎮守府が置かれることが決まり、早期に京阪神と舞鶴を結ぶ鉄道の設置が推進された。昭和元年(1926)ウラジオストックと舞鶴を結ぶ航路が開通したことで、舞鶴は人や物資が行き交う十字路となった。

昭和2年(1927)日米間の摩擦解消のために、アメリカから青い目の人形が1万2739体(舞鶴には11体)、日本に贈られた。第2次世界大戦で、ほとんどの人形は失われたが、舞鶴幼稚園に贈られた「ベティ・メイ」は戦火を免れ、全国に残った約300体のうちの1体となっている。



図2-49 青い目の人形

明治時代になると様々な娯楽が現れた。新聞は、明治22年(1889)『丹州時報』、明治34年(1901)『舞鶴新報』などが発刊された。明治31年(1898)に西地区に劇場ができ、その後、東西両市街地に次々と建設された。劇場は、この当時寺院以外に公共の会場がなかったため、招魂祭や慰安会場としても利用された。映画館も大正時代から盛況で、昭和16年(1941)には、東地区に5館、西地区に2館あったが、昭和19年(1944)、戦火が激しくなると、閉館に追い込まれた。スポーツ界では、昭和11年(1936)に大江季雄選手がベルリンオリンピックに出場し、棒高跳びで3位に入賞した。帰国後、2位の西田修平選手とメダルを分かちあった、「友情のメダル」の逸話は有名である。

明治22年(1889)、町村制施行によって、加佐郡内には1町24か村(現舞鶴市域1町17か村)の行政組織ができた。鎮守府が開庁すると、人口の増加にともなって新舞鶴町、中舞鶴町が誕生した。昭和13年(1938)に周辺地域が吸収合併されると、東舞鶴市と舞鶴市が誕生し、現市域は2市8村になった。第1次世界大戦の後、各国の軍縮が決議された影響で、大正12年(1923)舞鶴は鎮守府から要港部へ格下げとなったが、昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、舞鶴は再び鎮守府として復活した。海軍施設は拡張され海軍工廠での生産もさかんになり、昭和20年(1945)の敗戦まで「海軍のまち」として特異な発展をみせた。

第2次世界大戦が始まると、食糧や衣料の配給、出征兵士の見送りなど、戦争一色になっていった。昭和18年(1943)5月27日、軍部の強い要請で、東舞鶴市と舞鶴市が合併して舞鶴市が誕生し、市役所は現在の中総会館に置かれ、東西に支所が置かれた。人口は8万6051人、マイツルを図案化した徽章が一般公募により採用された。なお、現在の加佐地区はこのときの合併から外れた。

昭和20年(1945)、舞鶴海軍工廠では艦船などを生産しており、その従業員数は学徒動員がくとどういんによる生徒や女子挺身隊ていしんたいなどを含め、4万人にも達していた。7月29日、海軍工廠は空襲を受け、工員をはじめ動員学徒、女子挺身隊など



図2-50 市徽章

97名が死亡、百数十名が重軽傷を負った。翌30日の空襲では、乗組員など死者83名、負傷者247名にのぼり、ほとんどの艦船が撃沈されたが空襲の被害は軍事機密に属するとのことで公表されなかった。昭和20年(1945)8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し降伏した。

敗戦により鎮守府や海軍工廠は解体され、多くの人々が生活基盤を失った。昭和25年(1950)、市民の努力により「旧軍港都市転換法」が制定された。この法律は「旧軍港都市を平和産業港湾都市に変換することにより、平和日本実現の理想達成に寄与すること」をその目的にうたい、旧軍用の土地・施設、その他の財産は新しい都市計画に活用することとしている。この法律は舞鶴の復興に大きな役割を果たした。

戦後、加佐地区は加佐町となり、昭和32年(1957)5月27日の市政記念日に舞鶴市に編入された。

財団法人日本ナショナルトラストの『舞鶴赤煉瓦建造物群調査』によると、舞鶴旧鎮守府倉庫施設(赤れんが倉庫群)など、約120件の煉瓦建造物(橋梁・トンネルなどを含む)が確認されており、旧海軍の主要施設など煉瓦造の近代化遺産が群として現存していることも舞鶴市の特徴的な町並みをつくりだしている。

第2次世界大戦終結時、旧満州(現中国東北部)や朝鮮半島など海外に残された邦人は、軍人・民間人合わせて660万人以上といわれ、その人々の帰国を受け入れる引揚港(全10港)のひとつとして、舞鶴港が選定され、主に旧満州や朝鮮半島、シベリアからの引揚者・復員兵を迎え入れた。

昭和20年(1945)10月7日、第1船の雲仙丸を受け入れてから、昭和33年(1958)9月、最終船の白山丸を受け入れるまでの13年間に、66万人余りの引揚者を迎え入れた。引き揚げとシベリア抑留の歴史を語り継ぐため、昭和45年(1970)、「岸壁の母」の舞台となった平の引揚棧橋を見下ろす丘陵地に引揚記念公園が整備され、昭和63年(1988)、その公園内に「舞鶴引揚記念館」が開館した。舞鶴引揚記念館が収蔵するシベリア抑留と引き揚げ関係資料「舞鶴への生還 1945-1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」(570点)については、特に希少性が高く、世界的にも重要性をもち、広く世界の人々が共有すべき資料として、平成27年(2015)10月10日、ユネスコ世界記憶遺産に登録された(ユネスコ世界記憶遺産(世界の記憶):世界的に重要な記録物への認識を高め、保存やアクセスを促進することを目的とし、ユネスコの事業として平成4(1992)年に開始された)。

平成28年(2016)4月25日、文化庁より、地域の文化財や伝承などを観光資源として活用する「日本遺産」に、旧海軍の拠点「鎮守府」が置かれた4市(横須賀市・呉市・佐世保市・舞鶴市)が共同申請した「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴—日本近代化の躍動を体感できるまち—」が認定された(日本遺産:文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語るうえで不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取り組みへの支援制度)。

明治以降、それぞれに発展した東西市街地だが、同市内に城下町と海軍施設を併せもち、また、大浦・加佐地区の自然や特産物などの文化遺産を発信していく町として現在に至っている。



図 2-51 赤れんが倉庫



図 2-52 舞鶴引揚記念館